

学ぶことで自分の世界が広がる—— 日本語はそんなツールで構わないと思います

優秀な学生が多い、一橋大学への留学生

海外での日本語学習ニーズには、根強いものがあります。例えば、中国で国際交流基金が実施している日本語能力試験は、ネットで受験者を募集するとまたたく間に申し込みでいっぱいになってしまうほどです。また、就職難で大卒就職率が50%程度と言われている中国でも、北京外国語大学の日本語学科では卒業前に全員の内定が決まっています。日本企業も数多く進出していますから、日本語ができると就職には有利なのです。ベトナムでは、日本語に加えてIT技術などを持っている学生は引っ張りだこです。

一橋大学の留学生は優秀で、日本人と同様に読み書きができますし、自分の言葉で話ができます。ディベートのクラスでは、日本人の学生が見学に来るほど内容の濃い討論を行っています。

私は長春の東北師範大学に日本語教師として指導に行ったことがあります。これは文部科学省と国際交流基金、中国教育部のジョイントプログラムで、すでに30年近くの歴史があります。そこで教えた学生で、一橋大学商学研究科の関先生のところで博士号をとった男性がいます。帰国後は中国・無錫の江南大学で専門の教育研究を続けながら国際交流関係の責任者として活躍の場を広げています。

日本で就職した人でも、外国人枠ではなく一般枠でテレビ局に就職した中国人学生もいますし、経済学研究科の博士課程を中退して日本で就職したある中国人男性はアジア全域をフィールドに仕事をしています。母国語と日本語、英語のトライリンガルの卒業生が日本企業及び外資系企業で活躍しています。

日本語教師に必要な想像力と 実習による日本語教授法の修得

日本語教師教育のポイントは、大きく分けて2つあります。

まず、想像力のある人を育てることです。留学生にはいろいろな国の人があります。1つの枠のなかでは捉えきれないことがいくつもあります。今までとは違った場面や同じように見えて違った環境に遭遇したとき、その間を埋めるような想像力が必要になります。

ベトナムに教えに行ったときのこと、バイクタクシーで移動している途中、もの凄いスコールにあいました。授業時間が迫っているので大雨のなか、少しでも早く行こうとドライバーをせかしましたが、運転手は「先生、時間には学生は来ないよ」と言います。実際に、スコールが止むまで学生たちは教室に来ませんでした。「なんて時間にルーズな！だから、ベトナム人は…」と考えてしまったらどうでしょうか。バケツをひっくりかえしたような大雨のなかを移動するのは危ないのです。

中国で教えている熱心な日本人教師が複数の大学の学生に呼びかけ

て日本語新聞を発刊しました。語学の勉強には有効な手段といえます。学生の自主的活動もいいことに見えます。ところが、天安門事件を経験した中国人の教師が私に、「新聞は危ない」と言ったのです。何か問題が起こったとき、日本人教師は帰国してしまうことができますが、新聞編集の中心となった中国人学生は逃れようがないというのです。日本と同じだと思っはいけないですね。現在、どうやって危険を回避し、活動を継続するかを模索しています。

もう1つのポイントは、日本語の教授法をきちんと実習して実践していくことです。時代に合わせて日本語教育も変わっていきます。自分でその枠組をつくっていけるようになってもらいたいと思っています。

日本語教育は日本化教育か 日本理解のツール提供か

スーザンというアメリカ人留学生は、日本語の表現に居心地よさを感じるといいます。プッシュプッシュで自己主張をするアメリカスタイルに疲れてしまって、日本語的な控えめな表現に救われるということです。日本語に居心地のよさを感じる外国人がいるということは、面白い発見でした。

一方で、日本語を教えるなんておこがましいという主張もあります。日本がもっと多文化共生社会になっていって、自分の言葉で自分のことがしゃべれて、日本語を勉強しなくても生きていけるような社会にすべきだというわけです。日本語教育の裏には日本化教育の押しつけがあるという考えでしょうか。

私自身は、日本語を勉強することでその人の世界が拡大するチャンスが広がるならそれでいいのではないかと考えています。例えば、北京の大学で教鞭をとっている日本人教師の授業は、単なる日本語という言葉の教育にとどまりません。あるときはテレビで放映されたダウン症の母子の番組を教材にしました。テレビを見る前に学生に対して行ったアンケートでは、子どもがダウン症の可能性があるとわかった段階で中絶するという答えが99%でした。ところがテレビを見て討論した結果、それが大きく変わっていったのです。

日本語は、日本理解のコミュニケーションツールでもあります。ヨーロッパから来ている学生は、アニメから日本語学習に入っているケースも多いようです。同様に、北京では「アニメ・アフレコ大会」がはやっています。彼らの流ちょうさと熱気には驚かされます。

センターの初級クラスにいるナミビアの学生は、日本のお寺や古美術がすきで、関連の言葉をよく質問してきます。興味のあるものには自然にアンテナが張られて、言葉をキャッチするストラテジーが生まれます。言いたいことや知りたいことのある学生のほうが、教える側としても面白いものです。

2005年度から、言語社会研究科で日本語教育を専攻している学生の

希望者が北京大学の日本語学科で教壇実習を行っています。2006年度から一橋大学のOBの勤務先であるダイキン工業から奨学金をいただいています。相互交流として北京大学の日本語学科の学生が一橋大学に短期留学するための援助もいただきました。その他、如水会北京支部のみなさんには本当にいろいろと助けてもらっています。中国で活躍している先輩たちは日本語教育の重要性を認識しているのです。

大きな課題は安定的な日本語教育環境

日本語教育の世界は世に言うワーキングプアそのものです。留学生の場合は、国に帰れば仕事はあるでしょう。とはいえ、中国でも今では修士卒では大学の日本語学科への就職は難しくなっています。

20年前に私が日本語を教え始めた頃は、夫とともに赴任した海外で日本語を教えることが多く、主婦のアルバイトという形が主流でした。配偶者の給料という安定収入があったのです。しかし、最近日本語教師を志す学生は、高校・大学時代から日本語教師に憧れ、これで食べていきたいと考えている人も多くなってきています。しかし、日本語学校には、常勤の日本語教師採用枠を拡大したり、よい給料を出せない事情があり、不安定で低収入という状況は20年前とあまり変わっていません。日本語学校の時給は20年前とほぼ同じです。

昨年、言語社会研究科を受験した学生の例をお話ししましょう。中国では受験ビザを取るのが難しいので、いったん日本に来て日本語学校で学んでから受験するケースが多くあります。彼女の場合は青島で活動するNPOのサポートもあり受験ビザで来日し受験をしたのですが、合格できませんでした。とても熱意のある学生で、研究生として勉強して再受験したいと希望しましたが、一橋大学では原則として国費留学生か政府派遣留学生、それに準じた学生しか研究生としては受け入れていないのです。そこで、他大学の先生をお願いしたところ、

幸いにもその大学の研究生として来日できることになり

とても喜んでいました。ところがふたを開けてみると、ビザがおりず、日本に来ることができません。

これは珍しいことではなくて、日本語学校では申請した学生の何割しかビザがおりないことも多いのです。そのため常勤の教師を増やすのが難しい。非常勤の教師は身分も収入も不安定になります。日本語教育関係の職場は、残念ながら安定していないのです。安定的に日本語を教えられる環境づくりをどうするかが、重要な課題といえます。(談)



留学生センター准教授（日本語教育）

西谷まり

Mari Nishitani

1961年生まれ。一橋大学法学部卒業、国際基督教大学大学院教育研究科博士前期課程修了（教育方法学視聴覚教育専攻）、国際学会日本語学校・上智大学比較文学部日本語日本文学学科非常勤講師、一橋大学経済学部専任講師等を経て、1999年4月から留学生センター講師。なお、中国の東北師範大学赴日本国予備学校（2000年3月～8月 文部省〔現文部科学省〕派遣）、北京日本学研究中心（2005年3月～7月 国際交流基金派遣）に赴任。1998年よりほぼ毎年、ベトナムにおいて日本語教育及び日本語教師教育に携わる。

